

紹介

大貫恵美子著

『日本人の病気観——象徴人類学的考察——』

本書は比較文化的な視野から独創的な手法を用いて、日本文化が、日常行われている日本人の衛生習慣や疾病の治療の意味をどのように規定しているかを研究したものである。その結果、日常の衛生習慣や疾病の治療は一見現代の西洋医学（本書では生医学という）に基づいているように見えながら、実際は非常に根深く日本文化的に意味づけられたものであるということを描き出し、さらにこれを深く分析して、一部の社会学者たちによって主張されているような、近代化が進むと合理的人間が誕生するという理論は根本的に間違っているということを明らかにした。

本書は第一部、第二部から構成されており、第一部は三つの章からなっている。まず第二章では現代の西洋医学的病原論の見地から行われる日本人の日常衛生行動を貫く基礎概念が、実は日本人が古来から有する概念に通じていることを述べている。すなわち、今日の清潔、不潔の概念は、「清浄」、「汚濁」という旧来の象徴概念に基づいており、かつ、清浄、汚濁を生み出すのと同じ象徴構造が空間、時間、人間の分類に深く関与しているという。

第三章は一般の人々によって認定される疾病が文化によって規定されるとし、第四章では日本人の病気概念の特質として、著し

いかつ重要な非精神的な病因（本書では物態化という）について述べている。つまりこれは、病気の因果関係を神経組織、血液型、水子などの客体、現象に求める論理のことである。

第二部は六つの章からなり、日本の都市部での多元的医療制度について述べている。まず第五章は、漢方について述べる。すなわち漢方と近代西洋医学とは理論的に互いに正反対の立場にあることを明らかにし、ついで漢方に人気がある原因について探った後、漢方がいかに多様に庶民の生活に浸透しているかを解明している。

続く二つの章では医療における宗教の役割を扱っている。すなわち神であれ仏であれ、すべての超自然的存在は、清浄対不浄、内側対周縁という象徴的概念から派生している。周縁は不浄であり、外側は善悪両性の力と意味が付加されている。これは現代日本人の日常的な衛生習慣の基礎にあるものと同じ象徴構造であるという。

次の二つの章は日本の近代医療の受容が、他の国における受容過程と異なり、日本独自のものがあることを強調している。

最後の第十章は基本的に異なる種々の医療体系がどのようにしてうまく共存しているかを探り、その秘訣はそれぞれの医療体系が日本の社会文化的環境に深く根ざしているということによるのではないかと、結んでいる。

本書の内容は、この種の研究において我々が通常接する研究のタイプとは著しく異っており、聞きなれない用語も随所に見られるので、本書を読んで十分に理解するには、かなり時間が必要で

ある。しかし、医史学が今後学問としてさらに発展するためには、本書に示された研究方法は、きわめて大きな示唆を与えていると強く確信している。

〔岩波書店 一九八五年 B六判 三五〇頁 二、二〇〇円〕
(杉田 暉道)

大村敏郎著『聴診器と注射器のふるさと』

本書は一九八七年十月三日、新潟における日本診療録管理学会での特別講演を著書としてまとめたものである。内容は医のシンボルに始まって、聴診器の歴史、注射器の歴史およびアンブロワーズ・パレの業績の一部を三本の柱としている。日本の医学の歴史にかなりの影響を与えながら、普通は見落とされがちなフランス医学を取り上げた点で、異色といえは異色の本である。著者の大村敏郎先生は慶応義塾大学医学部を卒業後、パリへ留学された。そのさいパレとラエネックの生地を訪問された。その後の外遊のさいブラヴァーズの生家を訪ねられた。これらの「ふるさと」を自分の足で訪ね、身に付いたフランス語を駆使して自らの眼で確かめたのだからこれほど正確なものはない。

本を手にしてまず、感ずることは、「青、白、赤」のいかにもフランス的感觉である。写真が非常に多いのもとつきやすい。各章が飾り大文字で始まっているのは古典をひもといっているような錯覚に捕われる。

アスクレピオスからヒポクラテスと読んでいるうちに、フランス西部のカンペールの町にたどりつき、ラエネックの像の前に来たような気がする。この項は聴診器誕生のエピソードで結ばれている。

聴診器のふるさとが西の海側にあるのと对象的に、東の山側にあるのが注射器のふるさとである。リヨンのオテル・デュ病院の付属博物館で銀製の注射器を見たのが、最初の出合いであった。一二〇年前の銀製の第一号であった。大村先生はこの時の印象が忘れられず、後年再外遊の時注射器製造者ブラヴァーズの生家を訪ね、新事実に出合う様子が躍動的に書かれている。まさに本書の白眉であろう。

本書の最後の三〇ページほどは、アンブロワーズ・パレと、日本での翻訳の事などが記されている。樫山鎮山の『紅夷外科宗伝』に書いてある肩関節脱臼整復図は、パレ全集のオランダ訳を日本語に重訳したものである。杉田玄白らの『解体新書』翻訳より約七〇年まえのことである。これについては大村敏郎監訳、東京都柔道接骨師会訳『アンブロワーズ・パレ 骨折編・脱臼編』を参照されたい。いずれにしても大村先生のもっとも得意とされるところである。明後年はパレの没後四百年に当たるので、日本でも顕彰事業が成功することを祈って、本書書評のしめくくりとしたい。

〔二六五〕考古堂書店 新潟市古町四 A五判 一、五〇〇円〕
(大滝 紀雄)

石田純郎編著『蘭学の背景』

ずいぶん以前のことであるが、まだ岩生博士がお元気の頃「蘭学の研究が近頃のように精密になってくると、どうしても蘭学の源流というか背景というかオランダの科学史の研究が必要となりますね」という意味のお話をしたことがある。私はポンペの事を少々勉強した後で、ポンペが彼の著書に、日本の学生にはオランダ本国の手引書的な書物では理解困難なことが書いてあって、かえって彼らを混乱させる恐れがあるから別に日本人向きの講義案を作って講義に使用したという意味の事を記しているの、ポンペがそれを作製するには必ずそれなりの種本があったにちがいない、と考えていたからである。ただし今日とちがっておいそれとオランダに行くわけにもいかず、また我々では、それを探すことも理解することも困難なことなので話はそのままに終わったが、当時から二〇年あまり経たこの石田博士の新著によると、はたしてポンペの日本での医学教育の背後には、彼が卒業したウトレヒトの陸軍軍医学校のカリキュラムがあった事が立証されている。

本書はこの数年来屢々オランダに飛んで新しい史料を発掘し、やつぎばやに数々の新しい研究を発表してこられた石田博士の新著である。今日まで同氏からは発表の度毎に論文の別刷を頂戴しているの、御研究の概要は承知しているつもりであったが、現在このように一貫した大著として拝見すると、シーボルト以来の蘭学の源流というか背景というか、それが良く判り教えられるとこ

ろが多かった。本書の見どころは、何と言っても第三・四章のウトレヒト陸軍軍医学校の医学教育に関する詳細な分析と、第二章のシーボルトのヴェルツブルク大学の医学教育の研究である。その他に第一章として「ライデン大学の創設とオランダ独立戦争」という概説があり、第五章として「蘭領インドの医学教育」、第六章「オランダの化学薬学の学統と幕末日本の化学」がある。この二章でも日本との関係が著者独自の観点から分析されている。第九章「日本における西洋医学システムの受容」は著者の持論であるらしい、日本の医科大学のカリキュラムの硬直性が、幕末明治初期にそのモデルをオランダというよりもむしろプロシアの軍医学校にとつた影響である、という論旨であるようである。医学者ならぬ我々にはその是非は判らないが、そうばかりでもないような気もするがいかかなものであるか。第七・八章は本書の本来の論旨には関係のない、著者のいわばホビーとも言うべきオランダ名物ジュネーバと、シーボルト等の関心を惹いた日本特産「大さんしょう魚」についての論稿であるが、かつて「出島図」の研究のお手伝いをした筆者には、ジュネーバの瓶の形からの年代推定にはいろいろの意味で興味があった、などと書き列ねていると早くも指定された紙幅を超過しそうになったのでこの程度に止めよう。

本書は「あとがき」によると、石田博士と博士の親交あるオランダの医史学専門家であるボイケルス・ランゲフェルト、ド・ムーラン、ロイエンダイク各教授との共同執筆の由であるがたまたたんなる翻訳ではなく石田氏によって翻訳されるに当って十分手

を入れられ補足され再構成されているので、あまり翻訳臭や合成調を感じさせない出来栄である。教室や研究室だけでなく、この方々の家に「居候」して、好きなジュネーバを傾けながらディスカッションのできる著者にしてはじめて可能な協同研究の大きな特色と言うべきか。

最後に一言。本書の内容には無関係の事であるが誤植を一つ挙げる。第一章末の参考文献および註の部に挙げてある論文の著者松田美津夫は椋田美津夫の誤りである。姓名の誤記は本人にとっては決して愉快なものではない。本書はきつと再版の出る好著であるから、再版の時には是非訂正して頂きたい、最後にはなはだ書評らしからぬ書評に終った事を著者御本人並びに編集部にお詫びする。

〔思文閣出版 一九八八年 A五判 三四一頁 三、八〇〇円〕
(沼田 次郎)

木村陽二郎監修『図説 草木辞苑』

本書は、植物名辞典ともいふべきものであるが、監修者の「日本の代表的な古典や古辞書にみえる植物名を中心に、多種多様な名彙とその表記を集めたのは、植物図鑑類の欠を補い、また一般の辞書の内容に加え、広く日本の植物文化を知るための基礎づくりを目指したものである」という言から、内容、目的がわかる。さらに「編集例言」の「本書に収録したのは、日本文学上の古典

とされる作品や各種文書・記録・資料などにみえる、国産のおもな植物名とその関連用語、さらに、幕末から近代初めにかけて渡来した一部の植物である」という文章が具体的に本書の内容を示している。

本書は、名彙検索編(五十音索引、総画引難読名彙索引)、植物名彙本編、救荒植物編(救荒山野草木一覽)、花材植物編(花材等觀賞植物一覽)、植物名数編(第一表植物関係用語、第二表植物の名称)、図録・図録(万葉集品物図絵、花譜、菌譜、七十二候新撰)、参考資料編(植物関係枕詞・序詞一覽、襲の色目一覽、気節と植物)からなる。

項目の記述は、当該植物の分類もしくは項目記述の定義、自生・栽培などの生態、同名、古名、別名、漢名、生態・用途上の特質や和名等の由来や語源諸説などの注記、渡来関係記事、対照項目や語彙、用途、季題(季語)としての季節、紋所、出典、図版である。

救荒植物編は、主に江戸時代以来、飢饉時の救荒植物を一覧表としたものである。出典は八点の文献である。用途分類、摘要(薬用、弱毒部分、利用部分)を記載している。

花材植物編は、各時代・時期にみられる花書および園芸書中の植物の一覽表である。花季の季節、洋名・渡来時期、出典二点の文献を記載している。

本書は巻頭に彩色図絵を八頁にわたり載せており、凡例中に出典の文献の名称、略称を記しており、さらに依拠・参考文献(古典文学作品、古辞書、参考資料、花材関係資料、図録資料、辞典・

図鑑)を七頁にわたって示している。

本書は、本来は、国文学、日本史関係の人文科学系研究者に役立てるため作られたものであろうし、その方面の人たちにはおおいに役立つものであろうと思われる。しかし、本草学史研究にとっても、このような辞典は役立つものであり、医史学研究者にとってもまた、必要なものと考ええる。

医史学研究において、資料中の植物名、さらに医薬としての植物(薬物)名がおおいに問題になるが、現代の植物図鑑では、なかなか思うように行かない経験を私などはもっている。そのために必要な本は、本書の参考資料にも見られるように、すでにいくつかのものがあるが、さらに、本書はかなり系統的にまとめられた本として、我々の前に登場したのである。利用をおすすめする次第である。

〔柏書房 東京 一九八八年 B五判 一八、〇〇〇円〕

(矢部 一郎)

W・ブロード、N・ウェード著 牧野賢治訳

『背信の科学者たち』

先の学会で Opening Pandora's Box (Gilbert, Mulkey) に書かれている「酸化的燐酸化」を中心としたもっとも競争の激しい分野での醜い闘争についてふれたが、今『背信の科学者たち』という本を読み、研究の先陣争いのための欺瞞をみて強い刺激を

受けたのでここにその概要を記す。この本の著者は“New York Times”の science reporter かつ editorial writer との共著であるが、実に微に入り細を穿った報告である。またこの本の終りにはヒッパルコスからはじめガリレオ、ニュートン、ベルヌーイ、メーデル、ドルトンとよく知られた人の三四の事例があげられ、さらに本文の中にはダーウィーン、野口、パブローフ、ルイセンコ、プローカ、ピネラの例をあげ、そこにはパブローフのように助手に欺かれながらわかななかった事実もあげられている。本文は一二章からなり我々にとってはまことに興味深く、かつまた教訓に富んでいるものばかりであるが、すべてを記す余裕がない。とくに第一章におけるハーバード大学のダーシー事件は実験データでっち上げが見抜けられなかった一例であり、伝統的な科学観である「科学における認知構造」、「科学的主張の検証可能性」、「科学者による審査課程」のヒビ割れが報じられている。第二章は歴史的な検証であり、これなどは十分な歴史的な眼で中立的立場に立たない限り不可能である事がのべられている。たとえばガリレオの「実験と理論を結びつけた科学者」としてのイメージに反し、イタリア語での原文をみる限り「実験によって」というコトバは出てこない。最近私も気付いた事であるが、中央公論社の『日本の歴史』において「生理学者橋田邦彦氏は戦時中科学は国際的だが科学者には母国がある、という訳の分からない事を言っている」というような批判がなされているが、このコトバがフランス人のコトバである事実をこの著者は御存知ないようである。ついでニュートンのプリンキピアについても、ここに昭和五年の春秋社版

岡邦雄氏訳の書物がある。しかしこれは一八〇三年版の訳であり、これだけでは著者のような事実を見抜くことは出来ないであろう。(もちろん初版は一六八七年である)その他とくに著しい例をあげてみるとミリカン(ノーベル賞受賞)は都合の悪いデータはすべて除いているし、アルサプティにいたっては他人の論文を剽窃し二三年の間に約六〇報ほどの論文を書き、アメリカ中をわたり歩いていたという事実、ロングの発表したのはヒトの細胞ではなくコロンビアのフクロウザルのものであったことなどをみるとまったく啞然としてしまう。昔の論文のようにウサギの実験でも個々のデータを一つ一つ列挙するのではなく、統計処理された結果だけではその欺瞞を見抜くことも困難であり、追試もきわめてむづかしい(このことについては第四章に論じられている)またこれらの欺瞞が起こり易いのもっとも競争の激しい医学と生化学に集中していることを思うと考えねばならぬ事も多く、不注意で誤った時は訂正するという謙虚さも必要であり、研究者はこのような本を読み、常に反省をする必要もあると思う。

(柴田 幸雄)

〔化学同人 一九八八年 三一二頁 二二二〇〇円〕

梅沢浜夫著『抗生物質を求めて』

カナマイシンの梅沢浜夫博士の研究自叙伝である。

第一章は我が国でのペニシリン創製の経過を、実際にその創製

に携わった研究者の一人として、きわめて克明に記述している。ここで出てくる裏話はおもしろい。

順調に進んでいた研究が夏に入ってバッタリ進まなくなった。「これほどペニシリンが採れないのというのはおかしい。ペニシリンの研究というのは敵の謀略ではないか」という発言もあった。青カビは二五度以上になるとペニシリンを作らないことが後でわかった……など淡々と記されている。

フレミングが一九二九年ペニシリンを発表したが、研究をやめてしまったことにふれ、本書では次のように記されている。「それから先、精製しないまでも、ペニシリンの効果を検証すればよかったのにそれをしなかった。これにはいろいろな理由があるかもしれないが、その頃バクテリアの病気に化学療法などあり得ない、というのが学者の間の一般常識であった……そのことが原因だったのではないかと思われた」

第二章ではカナマイシンの発見について述べられている。その過程は詳細に書かれており、研究開発へのプロセスを教えてください。

「私が見つけた物質が薬屋にあるのを見たら、どう感じるだろうかと思ったことがあったが、仕事が終わってカナマイシンという薬ができ、その瓶を見ると、私に関係のないもののように思われた」と記されているのはどうしたことだろう。カナマイシンが結核の治療にはかりしれない貢献をもたらすことは十分予知できたのに。博士にとっては次から次へと構想が展開していく研究へのマイルストーンにすぎないという謙虚さからだろうか。

第三章は未知の領域ガンへの挑戦である。ガンの化学療法剤の研究に打ち込んだ著者ならではの想いがこめられている。

第四章、微生物化学の未来では次の一文が注目される。「しかし、ここで再度注意したいことは、先に述べたように、医学部の出身で化学療法、薬物療法を創設するための研究に従事している人はきわめて少なく、できあがったこれらの療法を批評する役目の人が実に多い。化学療法、薬物療法の研究は主として薬学、化学、農学の出身の科学者によって行われている。病気をよく知っているのは医学部出身者であるから、その人達がより多く自分の仕事としてこれに従事すれば、その進歩は実に速くなるかもしれない」

この研究自叙伝には博士と親交のあった『文芸春秋』編集委員、宮田親平氏の「パウル・エーリッヒから梅沢博士まで」が付け加えられている。宮田氏はこの中で「近代治療医学史上最大の天才、エーリッヒが創案した化学療法研究の正統な継承者、それを発展させた最大の功労者の一人」として博士の業績を讃えている。

(青木 允夫)

〔文芸春秋 一九八七年 B五判 二二二頁 一、二〇〇円〕

中原泉著『歯科医学史の顔』

戦後の学制改革により、歯科医学専門学校が大学(旧制)に昇格するにあたり、学部名称が論議され、歯学部なる名称が採用された。その結果、歯科医の職務が歯ではなく、口腔を対象とした口腔科であるとの本来の概念を対世間的にもまた歯科医自身にも認識させる好機を逸してしまった。著者は、十数年以上前からこの誤りを指摘し、また歯科領域での口腔外科の重要性をその著書のなかで警告してきた。今日、歯科骨内インプラントが歯科医療のなかでもっとも発展性のある分野のひとつとして注目されるようになったことは、著者の先見性を証明している。

本書が従来の歯科医学史書と異なるのは「後人はつねに、自らはあくまで先人の活動の継承に過ぎない、という謙虚さをもたなければならぬ。なぜなら、歴史なくして学問はないからである」との史観にたつて著者が自ら現地赶赴して調査し、また収集した資料にもとづいた著述であることで、新知見とともにカラー写真が随所に挿入されている。

八章よりなる本書は、近代医学の始まりとされる十六世紀から、しだいに分化専門化する時流のなかで十八世紀ヨーロッパで開花した近代歯科がやがて日本に伝えられ定着するまでの流れを、それぞれの時代の開拓者たちの横顔を通して簡明に解説している。

近代歯科の祖の一人、フォシヤールが、一八二八年に出版した

世界最初の歯科医学書『外科歯科医、もしくは歯の概論』の手稿が、写真とともに紹介されているが、これは著者の研究成果の一つである。十九世紀に入ると舞台はアメリカに移る。ここに世界最初の歯科医育機関であるボルチモア歯科医学校が創設され、やがて世界各国に歯科医学校が作られ、歯科医学はようやく徒弟制度を脱した。わが国の歯科医育機関はすべて私学によって創られたもので、明治二十年ごろより開業医の有志による私塾というべき講習会が開かれ、同二十年わが国最初の歯科学校、東京歯科専門医学校が開校した。現在の歯科教育の原流である東京歯科医学専門学校（明治三十三年東京歯科医学院として開講）と日本歯科医学専門学校（明治四十年共立歯科医学校として開校）の創立者・血脇守之助と中原市五郎について新しい観点から解説している。官立の歯科医学設立の請願は明治三十年より始まったが、富国強兵策に歯科は関係なしとする政府の姿勢により一顧だにされなかった。

麻醉法の導入はアメリカで始まり、歯科医によってはじめて臨床に应用された。本書は麻醉法の開発者としてウエルズ、その普及者としてモートンをあげ、麻醉法の開幕をめぐるくりひろげられた歴史的ドラマを興味深く綴っている。その他、歯科分科の功勞者についても広く記されており、歯科医学より見た人物医学史として医療関係者はもちろん、歴史に興味を持つ人々にとって非常に読み応えのある歴史書である。

（新藤 恵久）

「学建書院 一九八七年九月 A五判 三、八〇〇円」

札幌医史学研究会編『蝦夷地の医療』

本書は、島田保久、高下泰三、谷澤尚一、津田晴美、南雲三枝子、水島宣昭、山岸喬ら七氏の共同執筆になるものである。同書「おわりに」によると、本書は第三九回日本東洋医学学会学術総会が札幌で開催された記念として出版されたもので、できるだけ一般の人々にも判りやすくまとめたものであるという。

まず島田保久氏は「蝦夷地における医療のあけぼの」と医師たち」において、蝦夷地における医療の歴史を要領よく述べている。蝦夷地の医療に関しては、信拠すべき史料が少ないため、執筆する苦勞は十分に理解できるが、『蝦夷地の医療』と題するからには、幕命で蝦夷地に派遣された東北諸藩の兵士たちに随行した医師たちの動向をも無視するわけにはいかない。また函館において医学教育をも行ったエルドリッジの事蹟がまったく無視されているのは残念である。津田晴美氏は「アイヌの薬草」、山岸喬氏は「蝦夷地の幕府採薬師の任務とその史料」、「蝦夷地における薬草の栽培と御薬園」、谷澤尚一氏は「蝦夷草木譜」より本草学へ」を分担しており、各々蝦夷地の薬草関係の論考を分担して、本書の大半を占めている。なじみのうすい薬草などについては図を付して視覚に訴えているのは理解しやすく、親切である。谷澤氏は寛政四年に西蝦夷地へ派遣された幕史の一人、小林源三助の著わした『蝦夷草木図』とその写本について、詳細な考証を試み

ている。

島田、南雲の両氏は、「蝦夷地における鍼灸について」記述しているが、鍼医のみでなく、他の医師についても論じて欲しいものである。

高下泰三氏の「近世蝦夷地の疫病史」は種々問題がある。引用すべき先行する著書や論文を十分に利用していないと思われるからである。またある地域の疫史を研究するためには、その近隣の疫史を参照しなければならない。当然津軽や南部の疫史を考慮すべきであるが、それが欠けている。蝦夷地の疫病についての研究はきわめて少なく、まず今しばらく信拠すべき史料の中から疫病流行の史実を丹念に求める作業を必要とすることが肝要である。

この章の(附)として「蝦夷地と種痘」があるが、内容に誤りが多い。たとえば、一〇一頁の中川五郎治の写真である。この写真についての原発表者の阿部龍夫博士自身が、発表後この写真は本物ではないと訂正しているから、採用し、掲載してはいけないのである。事情をよく知らない研究者や一般の読者を誤らせるものである。また引用文献についても書き方が不統一で、引用箇所も不明である。水島氏の「箱館ロシア病院」についても、評者の論文を参考にしていない。

前述したように、本書は一般の人々にも理解しやすいように書いたものといっているが、各章末には参考文献が附されており、引用文も原文そのものが掲載されている。これは一般の方々はもちろんのこと、研究者の使用にも十分耐えることを目的としたものであることは明白である。そうとすれば、先行する研究書や論

文を十分に意識して編するのが通例であろう。

百年以上も前の文献を引用し、五十年以上も前の研究論文を参考にしながら、わずか数年以前の、しかも『日本医史学雑誌』に発表された密接な関連を有する論文を無視するのは、少なくとも科学的でないし、史学的でもない。本書の評価を落すものである。意見を異にするなら、批判をすればよいのである。

以上、二、三苦言を呈したが、本書が今後の「蝦夷地」(北海道)の医学史、医療史の研究上、看過してはならない書冊であることは間違いない。

(松木 明知)

〔北海道出版企画センター 一九八八年 一四×二二cm〕

二〇一頁 一、八〇〇円〕

岡本喬著『解剖学事始め——山脇東洋の人と思想——』

このたび『解剖学事始め——山脇東洋の人と思想——』が岡本喬氏によって著わされた。岡本氏は一九二四年の生まれで、これまでに詩集『地図』、創作集『ヒメジョオン』、『黄次郎雷次郎』、『理科室』、『遠めがねのけしき』など主として児童文学の領域で活躍されてきたときく。著者が本書を著わすに至った動機については、あとがきのように述べている。

「山脇東洋が京都六角獄舎で、日本最初の人体解剖(観臓)を行ったのは、杉田玄白が千住骨が原(小塚原)刑場で、人体解剖

(観蔵)を行った年より十七年も前の宝暦四年(一七五四)であった。私がこれを知ったのは遅く、いまから七年前であった。しかも、そのまましばらく東洋のことを考えたことはなかった。ところが、その後、蘭学草創期の本を読みあさり、玄白の著書も読むうち、蘭方医ならともかく、中国伝来の医学を継承する山脇東洋が、なぜ人体解剖を行ったのかを考えて強い関心をもつようになった。私は東洋の『蔵志』と数少ないかれの著書を読んだ。さらに、その師後藤良山の医説の書いてある『師記筆記』や『傷風約言』などを読み、また、荻生徂徠も読むようになって、ようやく東洋の姿をうかがいあがらせることが出来るようになった」

本書は、

- 一 六角獄舎での解剖
 - 二 解剖への反対の声
 - 三 養寿院とその門流
 - 四 空想的医学の破棄
 - 五 『傷寒論』への傾倒
 - 六 後藤良山と東洋
 - 七 徂徠学との邂逅
 - 八 山脇東洋の医の倫理
 - 九 東洋と杉田玄白
 - 十 東洋の死とその後
- と目次にあるように、伝統医学の中核にあった山脇東洋が、時代の制約の中で「人体解剖」に何を求め、どのような形で時代の魁となったかについて詳細に検討している。とくに杉田玄白との立

場の相違や思想的基礎としての徂徠学に注意が払われていて、歴史の変革期に立つ人の学問的情熱を克明に追求している。

本書について京都市歴史資料館長の森谷尙久氏は「古医方家山脇東洋が京都で行った、日本最初の「腑分観蔵」は、たんに医学という領域にとどまらず、撞着した思想への飛躍をもたらした。一つの実験行動が、思想の地平をきり拓く例がここにある。詩人岡本喬は、これを執拗に追跡し、山脇東洋に迫った。しかし、それは東洋の伝記というより、東洋を通して日本思想の追究であるといってもよい。思想の転換期におけるダイナミズムを見事に描いた歴史書である」との言葉を帯に寄せている。

〔同成社 一九八八年 B六判 二二〇頁 一、八〇〇円〕
(花輪 寿彦)

イヴリマリ・ベルセ著 松平誠、小井高志監訳
『銅とランセット』

——民間信仰と予防医学(一七九八—一八三〇)——』

一九八〇年五月世界保健機構は、人類がこの地球上から天然痘を抹殺することに成功した、と発表した。いわゆる痘瘡根絶宣言である。人類の誕生以来、つねに避けることのできない業病として、悩まされ続けてきた病をついに克服することができた。そのため有力な武器として活躍したのがジェンナーの牛痘接種法であり、その牛痘接種法の誕生から始まり、広く社会的に認知され

るに至るまでの歴史を跡づけたのが本書である。著者ベルセはその歴史を書くにあたって、牛痘接種法の発見の歴史そのものを書くだけでは不十分で、「この革新的行為の実施に伴って生じた躊躇、過ち、失望、落胆、幻想といったものを付け加えなければ」ならないと、まず自らに課題を課した。

イヴリマリ・ベルセは一九三六年に、フランス、ポルドー市の東南ガロンヌ川に沿うラ・レオルという小都市に生まれた。パリの古文書学校、ローマのフランス考古学学校を卒業後、二年にわたって国立文書館の管理官を務めた。リモージュ大学の教授を経て、現在はランス大学文学・人間科学部の近代史の教授である。このような経歴からわかるように、本書ではフランスやイタリアにある牛痘接種関係の古文書が、史料としてふんだんに利用されており、その史料の豊富さには驚くばかりである。

本書は三部からなる。第一部は「事件の経緯」で、天然痘の流行状況と牛痘接種法の世界への伝播を述べている。私的な行為として行われることによって始まった牛痘接種が、早い時期から国家権力の介入によって軌道に乗ることができた状況を克明に追求している。

第二部「種痘普及の社会的手段」では、牛痘接種の普及に大きな力となった捨子たちの存在と、聖職者たちの積極的な推進に触れている。私生児と捨子の増加によって、医師たちは自分の好むままにコドモを接種の対象にすることができ、コドモの養育所を痘物質の貯蔵所として役だたせることができた。しかし一方民衆の反痘意識や、知識人の反ワクチン論が牛痘接種に反対する力

として、決して無視することができない存在であったことを見逃してはいない。

「種痘をめぐる信仰」の第三部では、「病気の神話学」「万能薬の神話」も興味ある記述であるが、受けた種痘がいつまで効くのか、という種痘の永久性の論争が一八一六年にすでに始まり、普及にあたっての一種のブレイキになっていた様子が詳しく書かれている。「純粋性と永久性」と、ワクチンの起源と性質の謎について、詳しい考察を加えた「消えた足跡の発見のために」と題する章は、本書の圧巻といつてよい。われわれ臨床医が種痘を行っていた頃、使用していた大連・池田株や、リスター株が、人痘由来のものか、牛痘由来のものかについての議論があったことを懐かしく思い出す。

ジェンナーの最初の著述を読むと、牛痘はよく見かける病気のように思えるが、実はその発見がきわめてむずかしいものであったことを教えてくれる。牛痘接種の発明は、ジェンナーの絶えざる努力によることはもちろんであるが、幸運の女神に導かれた要素のおおいことも否定できないようである。

馬痘との関連で、ジェンナーが牛痘接種に用いた痘物質は、実は牝牛に感染した馬痘に由来するもので、この同じ馬のリンパ液が十九世紀末にフランスで再生され、今もなお世界中で働いているのではないだろうか、とベルセは大胆な推論をしている。

このような推論を羨しみながらも、ベルセは特殊な領域の歴史を扱うことのむずかしさを十分承知しているようである。すなわち「歴史家はこの領域では、事実の収集という仕事に甘んじなけ

ればならないからである。事実の解釈は、歴史学とは別な科学研究分野の仕事に属する」と述べている。歴史学と医学の二つの領域にまたがる医史学研究のむずかしさを、ズバリと言いあてられた感じである。

この困難さは、このような書物の翻訳にもあらわれている。訳者たちがすべて文科系の出身であることから、訳語の中にわれわれ医学系の者からみると、かなり気になる言葉がみうけられる。原著と照合せずにこのようなことを述べるのは、不謹慎のそしりを免れないとおもいますが、その一、二をあげると、「牛痘接種」、「人痘接種」という定着した言葉がありながら、これを「種痘」、「天然痘痘苗接種」と訳出している。「喉頭ジフテリア」が「ジフテリア性喉頭炎」であり、イギリスのヒボクラテス「シデナム」が「サイデンナム」というのは困ったものである。この訳書を読むのは、かならずしも医学系のものばかりではあるまい。一般の読書人が、本書から誤った牛痘接種の知識を得ることがあつては残念なことである。

さらに原著では、巻末に付録として原資料および文献目録が付されているとことであるが、訳書ではこれがすべて削除されている。わが国ではほとんど見ることのできない史料と思われるので、医学史を研究するものの立場から言えば誠に残念なことと言わなければならない。

さりながら訳者たちのいうように、「種痘に代表されるような近代医療の普及に対して民衆意識がどう反応したかを明らかにすること」が、著者ベルセの中心的意図であるとすれば、その意図

が完全に達成されている好著というべきであらう。

〔新評論 一九八八年 B六判 四二一頁 三、二〇〇円〕

(深瀬 泰旦)